

# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤龍弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番10  
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆

小林国二・小林善秋・高橋潔・加瀬由紀子  
室賀清輝・近藤マリ子・高橋利春・近藤善信  
後援・株式会社アサヒ  
印刷・(株)北越時報社



穏やかな笑顔の藤本幸邦御老師

ご家族の皆さままでご覧ください

## 『正義』とは

翠巖 龍弘

日めくりになり『正義をかざすと争いになる』の言葉を目にした時、捕鯨反対のグループが日本の調査捕鯨船に危害を加えた事件のニュースを思い出しました。  
「鯨は人間と同じ哺乳動物、知能もよく家族仲間と協力して生きています。そんな鯨をたべるとは可哀相で我慢ならぬ」と、反対するところが正義で、食べる人々は間違っていることとされます。しかし、日本をはじめ鯨を食する国や民族も多数あります。  
また、犬を食べる食文化の国もあります。「犬は人間の友達、犬を食べるなんて

考えられない」と思われている人も大勢おられます。スポーツ感覚で狩りを楽しむ人々、楽しみで生き物を殺す事に反対の人々、正義もそれぞれの立場、人によって違うものだとつくづく考えさせられます。  
上の写真の藤本幸邦御老師の『おっしやんの愛のこぼ』という本の中に、  
「お米を食べるアジア人  
肉を食べる白人さん  
牛を食べないインド人  
豚を食べないアラビア人  
馬のお乳はモンゴル人  
生血飲んでるエスキモー  
それでもみんな地球人  
互いに互いをわかりあい  
みんなで仲よく生きようよ」と、「地球人」という詞があります。  
それぞれの国や民族には気候風土や宗教、長い歴史によっての文化があり、食文化にも違いがあります。牛も豚も鳥も魚も野菜も皆生き物です。  
禅宗のお寺では食事の前に皆で「五観の偈」を唱えます。「<sup>一</sup>には功の多少を計り彼の来処を量る」「<sup>二</sup>にはこの食を育てた天地の恵みを感りそのご縁を思つて感謝します」

「<sup>三</sup>には己が徳行の全欠を付つて供に慮ず」「<sup>四</sup>には私は食を受けるに足る徳分があるだろうか推し量つて供養を受けます」  
「<sup>三</sup>には心を防ぎ過を離るることは貧等を宗とす」「<sup>三</sup>には執着心を防止し欲から起こる罪を離れるのは貧瞋癡の三毒を離れる事が根本的に必要です」  
「<sup>四</sup>には正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり」「<sup>四</sup>にははまさに食物と言ふ良き薬をいただく事は体の枯渴を治療する為です」  
「<sup>五</sup>には成道の為の故に今此の食を受く」「<sup>五</sup>には真実の道を達成する為に今頂きます」  
日本には昔から各家庭で食事の前に手を合わせて「いただきます」と唱えてから食事をする習慣があります。  
私達人間は他の生物の犠牲によって活かされています。違う文化、習慣をわかりあい、争うことなく助け合い、特に他の生き物のお命を頂戴していることを肝に銘じ、食前の「いただきます」食後の「ごちそうさまでした」の習慣を大事にし、諸々のものに感謝し、いのちを大切に生活する。それが犠牲になった動物への恩義であり、「正義」ではないでしょうか。

すべての悪をなさず。ありとあらゆる善きことは身をもつておこない。おのれの心をきよめんこそ。諸仏のみ教えなり。【法句經】



# 大般若法要・藤本幸邦御老師をお迎えして

翠巖龍弘

藤本幸邦御老師(長野市円福寺東堂)が九十九歳のご高齢にもかかわらず、六月十二日、安善寺の大般若法要にお越しくださいました。大般若法要の後、有難い法話を頂戴致しましたが、法話の冒頭に「しばらくでございませうとおっしゃったように、遠出されるのは何年ぶりとの事、お寺に二晩お泊まりになりました



が、とてもお元気で、法話をお聞きになった方々も大変感激され喜んでおられました。そんな中で私は、今日まで御老師の数多くの法話を聞かせていただき、また、御老師の数多くの実践となさって来られた事を思った時に、以前お書きになられた「花の真実」の文章が頭に浮かんでまいりました。

御老師様は宗教者として

まさに書かれておられる如くに行動して来られました。皆様には是非ご紹介させていただきたいと思えます。

## 『花の真実』

私の仏教はまことに簡単である。それは、自作の「花の真実」という詩に尽きる。

仏の慈悲に抱かれて  
露のいのちの人の身も  
善き種まきて永遠に

花のまことを咲かせなん  
この四行の詩が、私の仏道である。

いつさいの生きとし生ける衆生である地球の生命は、仏なる大宇宙に抱かれて、大自然の慈悲によって生かされているのであるという事実認識である。

これは人間の知識で考え出したものでもなく、人間の努力でつくり出したものでもなく、人間のはからいの外にある宇宙の営みである。それゆえ、私も自分の意志で生

まれたわけでもなく、自分の権利で生きているのでもない。父母の縁によって生まれ、気がついてみたら人間であり、男であり、わが家は円福寺だったのである。そしてたまたま円福寺が曹洞宗であっただけのことでも、もし他宗の寺に生まれていたら他宗の和尚になっていたであろうし、ヨーロッパに生まれていたらキリスト教の牧師になっていたかもしれない。

そこで私は、宗派の教義や宗教の相違にこだわらないのである。それよりも、この自分がこの世に人間として生を受けた人生をどう生きるかこそが、私の宗教なのである。

尊い一生である。しかもこれも自分のはからいの外で、明日をも知れぬ露の命である。うまれたものはいずれは死ぬのである。これは間違いない。しかし、生ま



れて死ぬまでの人生をどう生きるか、それは仏教者としての私が決めることである。そこに私が選べる人生があるのである。

ただ、死ねば失ってしまうこの世のすべては、権力も地位も財産も最愛の親族も、すべて無常のものである。これも間違いない。そこで死ねば失う無常のものを追い求め、これに執着することはむなしからやめることにした。多少の未練はあるが、あえて忘れよう

ととめた。では、この世に生まれた自分が追求する真実とは何か。仏教とは「諸悪莫作衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」と示されている。悪いことをせず、よいことをして自分の心を清く生きていることが仏教であるという。

それでは悪とは何か。悪とは他を困らせることである。善とは何か。善とは他を喜ばせることである。心を清く生きているとは何か。争いのもとである欲を少なくし

つねなきこの世にありて すべてのは相より生ず 今ある自分とて 多くの力が相より相集まって出来た 飯の一時の姿である よろごもあれ ばかなしみもある これまたやがて過ぎ去らん



て、平和のもとであるとい  
くしみの心を生きていること  
ある。これが仏道である  
納得し、これを信じ自分を  
いましめ励まし、この世に  
生きていく間にできるだけ  
よい種をまいておこうと誓  
ったのである。これが私の  
仏道である。

「よい種をまこう、よい種  
をまけばよい花が咲き、よ  
い実が実る。地球が花に包  
まれ、みんなの幸せがたく  
さん実るように、よい種を  
まこう。もつともつとまこ  
う、いのちのあるうちにた  
くさんまいておこう」、これ  
が私の願行である。

自分が見性成仏しような  
どと思ったことはない。思  
つてもかなわぬことを知っ  
ているからである。ただ悪い  
ことをすると心が痛み、よい  
ことをするのが楽しくなっ  
たのである。子供がお菓子を  
もらって喜ぶように、仏さま  
がくださるお菓子はほんと  
うにうれいからである。  
思うに、この世のすべて  
の所有というものは、生き  
ている間のあずかりもので  
ある。それゆえ死ねばみな

置いてゆくものなのだ。そ  
こで、死ぬときになつて惜  
しんでみてもはじまらぬの  
で、今のうちに自分のもの  
は持たないことにした。そ  
うしたら肩の荷が軽くなっ  
た。そろそろ人生のゴール  
が近づき、仏さまの国に入  
るゲートも見えてきた。私  
は今、ラストスパートを走  
っているのである。自分の  
人生の最善を走って、次の

世代にバトンを渡さねばな  
らないからである。肉体は  
灰になつても、私が走った  
人生の記録は、永遠に受け  
継がれる心のバトンである  
と信じている。

仏陀の大道、大慈悲心のコ  
ースを一所懸命走ったこと  
に悔いはない。人を愛し花を  
愛する真実のみが永遠であ  
ることを信じているからで  
ある。愛する衆生のために



「KAKA笑の会」報告

シヤンソンと津軽三味線コンサート



五月三日夜、安善寺本堂  
に、東京より大勢の華やか  
な歌手たちがやって来ま  
した。翌日津川で開催され  
る「きつねの嫁入り」とい  
うイベントに、出演するた  
め新潟入りしたのですが、  
「KAKA笑の会」の活動  
を伝え聞いた代表の清水  
康子さんが、長岡に立ち寄  
り、コンサートが実現した  
のです。

「当日の出演者と曲目」

(演目順に列記します)

生き、愛する衆生のために  
死ぬ、それが私の本望であ  
る。あとは何もいらぬ。

今回の法話の中に「実行  
しなければ現れない。実行  
して証明しなければ意味が  
ない」と言われておしまし  
たが、私も肝に銘じ、思う  
だけでなく、少しでも行動  
していきたいと願っており  
ます。

合掌

- じゃんがら おてもやん
- あがらしやれ 秋田長持歌
- ふるさととここに
- ある日わたしは
- 遠い道
- サンジャンの私  
の恋人
- SHE
- 愛しい人よ愛の言葉を
- 永遠に咲くバラ
- バラ色の人生



当日は連休前にも関わら  
ず満員の盛況で、贅沢な企  
画は好評でした。



# あら 新たにしく

墨詩の会代表 高井松男



いままでやってきた事もそうですが、いま皆様方の応援でいろいろな事が始まろうとしています。今年から七月三十一日に長岡祭の前夜祭としてフェニックス能を始めます。今回は新作能「兼続」です。兼続は来年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公ですが上杉謙信の後継者である景勝の名家老で、長岡ほか越

後各地に所縁の人です。取材で米沢、会津、六日町、与板などをくまなく回り、漸く本を書き上げました。いままでいろいろ書いてきましたが、能を書くのは初めてでそれなりのプレッシャーを感じながらも、冒頭にワキの私が般若心経を詠んだり、田風ノ舞、雪馬ノ翔など特別な舞や所作を加えたりで、面白いものに仕

上がりました。東京も含め各地で公演の予定です。長岡公演では実行委員長を長岡商工会議所会頭の田村巖氏にお願いしましたが、その他頼りになる実行委員がそろっており、加えてフジテレビ系の地元新潟総合テレビの協賛も頂き、また長岡市、新潟県の助成も決まっています。が順調に進んでいます。

シテは観世流若手のホープ観世喜正氏。チラシ用の装束、面合わせも済みました。この催しは毎年七月三十一日に続け、来年からは新能の予定です。

二年続けての新作はしんどいと思っておりますが、思わぬ口走りから、来年も長岡で、私の出身校長岡高校（旧制長岡中学）の偉大な先人として人格化されている、山本五十六元帥を題材にした新作能「五十六」に挑戦したいと思えます。五十六も兼続も、武人ではありながら決して好戦的ではないのが共通しています。かなりの覚悟が必要ですが、いつかやりたいと思っています。



十月十日には、世話人代表である佐藤清氏の骨折りで、新しく立ち上げた舞台芸術プロジェクトが制作する昭島新能（能「上蜘蛛」、狂言「根音曲」）を催します。派手な照明や音響を使わない、いわゆる昔ながらの薪能です。シテは喜多流の重鎮、香川靖嗣氏、狂言は狂言界の人達からも尊敬を集める大蔵流、山本則直氏、則孝氏です。

漣って、四月二十三日には船橋きららホールで、五月二十二日にはルネ小平で、二人語り墨詩「酒吞醉夢」―酒吞童子異聞を公演します。船橋は、長岡花火ツアールでお付き合いの始ま

った猪瀬邦子さんのご主人英雄氏に実行委員長をお願いし、船橋よみうり新聞社の協賛です。

この他、十月に「紅葉幻想」を、また期日未定ながら新作能「良寛」も予定しています。なお、題は未定ながらインターネットカフェを舞台にした初の現代劇を書き、十二月二十六日のクリスマスアフターに魚沼市小出郷文化会館で公演する予定です。

とにかく生命あることの有難さを思い、精一杯挑戦していきたいと思えます。皆さまのご支援を引き続きよろしくお願い申し上げます。



高井松男氏プロフィール  
昭和二十三年生まれ。能ワキ方・下掛宝生流。（社）能楽協会会員（社）日本能楽会会員、重要無形文化財総合指定保持者、墨詩の会代表。早稲田大学第一文学部演劇科卒。



# 読者からの便り

## 日本百名山完登

鈴木忠一

日本百名山という言葉が聞かれましたか。第一は山の品格である、第二は山の歴史を尊重する、第三は個性のある山である事、この三原則で深田久弥や他の人々が名づけた山を、登山を趣味としている人達が挑戦しています。百名山の中で私が特に良かった山を紹介します。そ



れは北海道の幌尻岳です。二〇五二メートルのこの山は、平成十五年七月に台風が襲い、登山をしていた人々がヘリコプターで救出されたというエピソードのある山で、台風のために駐車場が遠くなり、登山口にくまで五キロメートルもの砂利道を歩かなければなりません。登山口につくと地下足袋と草鞋に履き替え写真のように膝上まで水にかりながら川をさかのぼりました。足をとられないようにに細心の注意を払いながら十五回ほどの徒渉を連続して幌尻山に到着しました。

# 意志を継承して続ける

初代安藤広報編集委員

長に捧げる記事は書けるものではないです。偉大で優しく物事が見えていた方だからです。一言で言えば「仁徳」を持たれた方でしたからです。

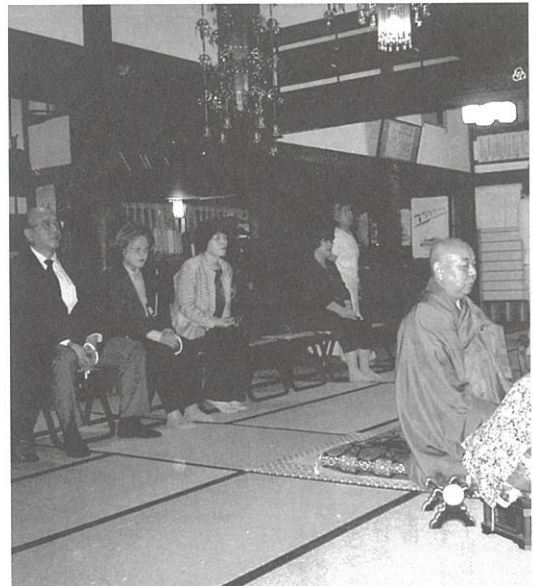
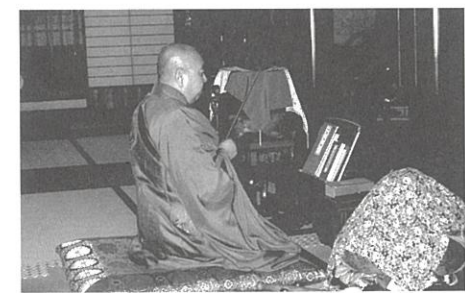
安藤前編集長とは安善寺の世話人会を通じて知り合いました。十年前の初月忌の席で近藤住職から安藤氏に安善寺の広報季刊誌を創刊する話があった時に居合わせたのが始まりでした。

二日目、山荘から針葉樹に覆われた急斜面のつらい登りを抜けると視界が急に開けます。正面には幌尻岳がそびえ、アオノツガザクラ、チングルマ、エゾマツなどの高山植物が咲き競っています。その美しさに思わず足が止まってしまいそうでした。山頂からまた高山植物を楽しみながらまた徒渉を繰り返しながら岐路につきました。

トントン拍子で話がまとまり創刊号を作るに一同が

集まり安藤編集長の号令の下、簡単に素晴らしいものが出来上がりました。季刊誌は安藤氏がほとんどまとめてくれるのでただ見てい

るだけで良かったのです。難しいことは一切なし。(株)アサヒの社長さんであつた安藤氏は会社の広報担当をしている近藤氏を伴い編集に当りました。ほとんどプロの仕事なのです。私達人人は好き勝手に言っていれば済みます。今でもそれを継承させて戴いてい



6月5日 安藤一夫 初代編集長の七回忌法要

ます。安藤氏はこの世を去る前に会社と近藤氏にこの安善寺季刊誌を継続するように遺言されたそうです。現在までその恩恵を私達は戴いており、彼は布施の心を後世に残しております。なかなか出来ることではありません。今回の追悼記事を二代目が書くべきとの皆様の総意で書かざるを得なくなりましたが、人間の度量の違いは力の違いは言うまでもありません。それだけに、偉大な安藤前編集長への寄稿は恥ずかしい限りです。ただ、ここで言えること

は、安藤氏の意志を継承せねばならないと言うことです。やれる限りはそれに応えてこれからも安善寺の季刊誌編集をやりますが、この季刊誌は読者参加型です。多くの読者からの寄稿が頼りです。皆様も安藤前編集長の意志を継承されますよう寄稿をお願いします。「子曰、徳不孤。必有鄰。」「子(し)曰(のたま)わく、徳(とく)は孤(こ)ならず、必(かな)らず鄰(と)なり有(あ)り。」「孔子云う、「徳のある人物は孤立することがない。必ず共鳴する人々が現れるものである」と。小林国二拝



# 【日々精進(四)】

## 境内の草木で生命と四季を感じる

近藤真弘

「目」で深緑を見、「耳」でセミの鳴き声を聞き、「鼻」で蚊取り線香の匂いを嗅ぎ「舌」で枝豆の味を味わい、「身体」でうだる様な暑さを感じる、正に五感全体で夏の到来を知らせています。

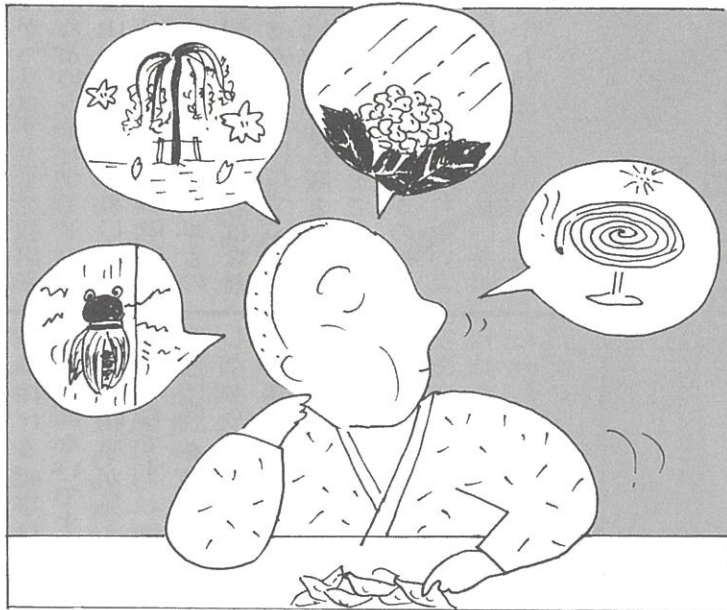
早いものでという表現を私はよく使いますが、本当に早いもので長岡に戻ってきて一年が経過いたしました。

この一年で、というか一年あったら当たり前のことかもしれないませんが、月の御経で伺っている御檀家さんのお宅の場所やお顔と名前もすっかり覚えることが出来、今ではカーナビなしで裏道なんかも使ってます。いと日々の檀務に勤しんでいます。

さて、私がこの一年で改めて感じたのは境内での四季の移り変わりです。というのも、正直今までの私はそういったものに興味が無かったというか、まじまじ

と意識して木々や草花を見ていませんでした。無意識の中、当たり前に移り変わ

木一本とっても緑色の葉が茶色く枯れて落ち葉となり、冬の間枯れ木のように葉つ



る自然を漠然と感じていただけでした。

しかし昨年からは、櫻の

一枚ない木が雪解けと共に芽が出て小さな葉っぱが木々のいたるところから出

て日に日にそれが大きくなり見えていたものが緑の目隠しをされたように一面を覆う。そんな様子を意識して見ると、当たり前に移り変わりの中に寂しさや、期待、喜びといった感情が芽生えてきました。

特別何も手を加えないでも生命を感じる木々にもこのように感動を覚えますが、自分で植えて手を掛けて育てる草花のような植物はまたさらに感情を注ぐことが出来ます。と言っても私はそこまで自分でやったことはありませんでしたが、私の母が春先から毎日暇を見つけてはガーデニングに精を出しています。見ているだけの私ですが鉢から土に戻した草木がしつかり根付いたり、それらが花を咲かせたりすると正直に嬉しい気持ちになります。

そんな中ずつと見ていた

だけの私ですが、実はこの春に一本の木を植えました。それは桜の木です。隣の公園は桜の木が多く、春になると満開の花で通る人を楽しませてくれるのですが、お寺の境内には桜の木がありませんでした。ちょうどそのころ友達のお寺に行くところには樹齢何百年の見事なしだれ桜があり、すっかり気に入って早速植物園に行き小さなしだれ桜を買って植林しました。

駐車場の脇に植えたその桜はまだ誰も気づかないくらいひっそりとたたずんでいます。聞いた話では十年も経つと二階の高さくらいに成長するそうです。今は桜に虫がつかないように点検の毎日ですが成長が楽しみです。

どんな環境の変化にも負けずに力いっぱい日々成長している草木からは、まだまだいろいろなことを学び教えられるような気がします。皆さんも安善寺にお参りに来られた際には、境内の自然で四季を感じ楽しんでいただけたら幸いです。

### お別れ

(平成二十年三月〜六月末)

小林与一様 三月三日寂 長岡市新組

田村サク様 三月十三日寂 長岡市平島

平澤晴美様 三月十七日寂 長岡市川崎町

小島浩志様 三月廿六日寂 長岡市松葉町

村田貞夫様 四月三日寂 長岡市東坂之上

溝田容子様 四月三日寂 埼玉原上尾市

金子秀子様 四月八日寂 長岡市神田町

高橋クラ様 四月十七日寂 長岡市宮内

鈴木英一様 四月三十日寂 長岡市西新町

間野シュ様 五月十日寂 長岡市中沢

寒川キヨ様 五月十七日寂 長岡市千手

大刀川昌治様 六月廿三日寂 長岡市表町

永井英子様 六月廿八日寂 埼玉県さいたま市

柴崎やす子様 六月三十日寂 長岡市希望ヶ丘

ご冥福をお祈りいたします



# 旬歌 愁灯

[その十七]

## 想いの届く日

—その二—

加瀬由紀子

「ル・ヌーヴォー」ワインの会。これは、私が代表を務める同好会の名前だ。そもそも「レザメ・デュ・ヴァン(フランス語で、ワインはともだちの意)」というアメリカに本部があるワインの同好会の日本支部が東京にあった。新潟支部を創らないか、という話が進み、旗揚げをしたのが二十一年前。しかしながら、これが大

ブリーング。年会費一万円納入の特典は、都内レストランの優待とかで、新潟の会員にとつてのメリットは全くなかったからだ。

それでは、新しく組織を創ろう、それも年会費とか、ややこしい規則に縛られることのない、楽しいサロンの集まりにしよう、と発足したのが二十一年前の秋であった。その名もフランス語で「新しきもの」を意味する、「ル・ヌーヴォー」。発足式に集まったワイン愛好家は約六十名。ドイツ料理のレストランを借り切り、モーゼル等のドイツワインを揃えたのだが、会員も初めての集まりとあって、「ドイツ料理なら、ビールに変えてよ」「耐杯出して」といった、顔をしかめる要望も出たのを記憶している。

しかし、回を重ねるごとに熱心なメンバーはワインについて見識を深めていった。十年目の例会には、日本初の女性ソムリエ、野田宏子さんをお迎えして華麗なるデキャンティング(年代物のワインには、おりが沈

んでいるので、それをろ過する)を披露、百五十名もの会員が集まり、テレビのニュースでも放映された。

ワインとお料理の調和、気の合った仲間たちとの洒落た会話を引き出すイベント、をその後も心がけ、ある時はソムリエを招いての講演、ある時はシャンソンコンサートと一年に一回のワインの集いは続いてきた。

そして今年、記念すべき二十周年のゲストに頭を悩ませていたところに浮上したのが、デビューしてこちらも二十年を迎えたタンゴ歌手、冴木杏奈を招いてのデイナーショーだった。

さて、この冴木杏奈との出会いについて述べよう。私が取材記者をしていた当時の同僚が、音楽関係の出版社に勤めを変え、彼からプレゼントされたCD。「タンゴの世界にやっとな女性歌手が出てきたから、聞いてみて。」流れてきたメロディは、彼の恋の顛末を彷彿とさせ、華やかで官能的だった。ブエノスアイレスで恋

に落ちた女性の写真を見せ、嬉しそうに語った彼。旅の戯れ、と冷やかだったのは私たちだった。だが、彼はその後、想いをかなえるべく再度アルゼンチンに渡り、帰国。そして自殺したと聞いた。私の手元に

ラスト、スタンディングオベーション(総立ちアンコール)の中、私は二十年目のデイナーショーに、彼女を呼ぼうと決意した。しかし、公演への道は険しかった。まず、公演の費用。こちらの予算を事務所に

トに協力するという条件でマネージャーとようやく合意に至った。次のネックはバンド演奏。アルゼンチンから五人通訳二人、という条件は、その他スタッフ二名メイク一名も加わるので、私を悩ませたが、ついに事務所から国内でバンドを編成するから安心を、と連絡がきた。

最後の障害は日程の調整だった。マネージャーとの連絡は殆ど海外の都市にいるため、困難をきわめた。六月末に国内数箇所ですコンサートをするから、そのうちの一日を、貴方の夢を実現しましょうというメールが届いたのは四月末。チラシ印刷、必死で券売を開始。

バンドネオンの前奏でスポットライトが冴木杏奈を照らした。サルサのアンコールでは十数名が踊りだし、二百三十名の観客から「ブラボー杏奈！」の声と拍手が飛び交った。大成功！

タンゴ「想いの届く日」は私のために歌っている曲だと、充実感がワインとともに私を満たしていった：



蓮の花は 泥沼に根をおろし それを糧にして 美しい花を咲かせる 人いかなる困難にあっても 蓮の花のようでありたい



